


日本語教育と日本学研究の関係

中国の日本語教育と日本研究を例に



北京日本学研究中心
主任 徐一平
2009. 12. 15

1、背景

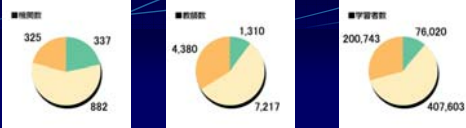
中華人民共和国成立後の日本語教育は、日本語の人材育成を目的に一部の高等教育機関で実施されていたが、文化大革命で一時中断した。

1972年の日中国交正常化後は何度か日本語ブームが起こり、改革開放政策の推進とともに学習者が急激に増えた。

2、日本語教育の現状

①学習者数増加

2003年39万人→2006年68万人(世界第二位)増加約29万人で、日本語教師も三年前の6000人から12000人に増加。



年	中国大陸	台湾地域	韓国
2003	325	337	882
2004	4,380	1,310	7,217
2006	200,743	76,020	407,603

2、日本語教育の現状

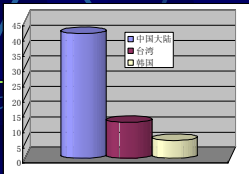
特徴:

- 1、高等教育の学習者数が一番多い
(中国大陸:41万、台湾地域:12万、韓国:6万)
- 2、日本語能力試験参加者が一番多い
(中国大陸:20万、韓国:7万、台湾地域:5万)
- 3、日本語専攻、修士、博士課程の増加
(日本語専攻:416大学、修士課程:約60大学
博士課程:5<日本語日本文学>+2<外国語外国文学>+8<その他>)

これらの学習者は日本研究の予備軍になる

2、日本語教育の現状

同発表によると、教育段階の状況から見ると、大学の学習者が一番多いのは中国大陸の40.8万人で、第二位台湾地域の11.8万人、第三位韓国の5.87万人を大きくリードしているものである。



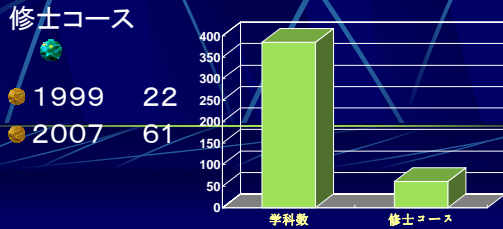
地域	人数
中国大陸	40.8万人
台湾地域	11.8万人
韓国	5.87万人

2、日本語教育の現状

中国の四年制大学(教育部の最新の統計)

国公立+民営	=	755	大学
独立学院	=	315	大学
755+315	=	1070	大学
日本語学科を持つ大学		416	大学
39%の大学に日本語学科設置			

2、日本語教育の現状



2、日本語教育の現状

②教材の完備と大学院課程の増設

各種教材の出版も盛んで、日本で出版された教材の版權を買い取り、翻訳出版するケースも増えている。
 また、中国ではこれまで小学校の日本語教育はほとんど実施されていなかったが、遼寧省大連市での実績をもとに小学生用の教材が制作され、今後の発展が期待できる。

2、日本語教育の現状

③学習目的の変化

日本語を学ぶ動機

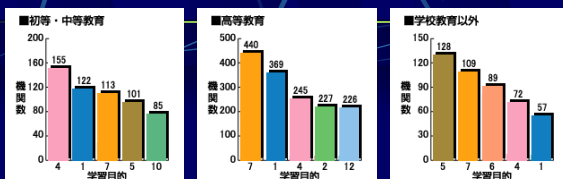
1. 日本の文化に関する知識を得るため、
2. 日本の政治・経済・社会に関する知識を得るため、
3. 日本の科学技術に関する知識を得るため、
4. 大学や資格試験の受験準備のため、
5. 日本に留学するため、
6. 今の仕事で日本語を必要とするため、
7. 将来の就職のため、

2、日本語教育の現状

8. 日本に観光旅行するため、
9. 日本との親善・交流を図るため(短期訪日や日本人受入)、
10. 日本語によるコミュニケーションが出来るようにするため、
11. 母語、または親の母語(継承語)である日本語を忘れないため、
12. 日本語という言葉そのものへの興味、
13. 国際理解・異文化交流の一環として、
14. 父母の期待に応えるため、
15. その他(1.~15.から5つ選択)

2、日本語教育の現状

初等・中等教育:文化理解第二位
 高等教育:文化理解第二位
 学校教育以外:文化理解第五位
 日本文化に対する理解という目的が、いずれも上位五つに入っているということが注目されるべき



2、日本語教育の現状

④教師の養成と日本語教育学修士課程の設置

1980年代からの在中国日本語研修センター(通称、大平学校)
 中等教育教師の研修機会
 日本語教育の多様化
 北京日本学研究中心の日本語教育修士コースが設置されている

3、日本語教育と日本学研究

①、社会に役立つ日本語教育

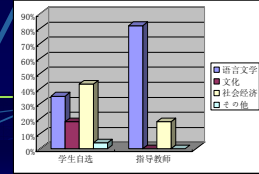
- コミュニケーションのための日本語教育→インターアクションとしての日本語教育→社会実践としての日本語教育
- これまでの日本語教育は、言葉の学習に偏り、総合的な知識と基礎的な能力の訓練と育成に欠けている。学生は、知識がやや狭く、視野と考え方が広がらない。
- これからの日本語教育は、社会と実際の状況と密接に結びつかなければならない。学生の総合的な能力を育成するのに、力を入れなければならない。

3、日本語教育と日本学研究

卒論からわかる文学、
 語学離れ現象

学生が選んだテーマ

言語文学	35%
文化	18%
社会、経済	43%
その他	4%



指導教官の出身

言語文化	82%
社会経済	18%

3、日本語教育と日本学研究

②、日本語教育から日本研究への人材育成

- 「大平学校」と北京日本学研究中心の試み
- 合計約1500名の人材を育成
- 約100名教授クラスの研究者が成長

3、日本語教育と日本学研究

③、人材育成モデルの変化

- 第一代: 日本語→外交ルート通訳→外交家
 唐家旋、劉徳有、王効賢など
- 第二代以来:
 日本語→外交ルート通訳→外交家
 武大偉、王毅など
- 日本語→教育・研究→日本研究者
 「大平学校」以来の努力

3、日本語教育と日本学研究

- 日本語研究: 徐一平、朱京偉など
- 日本文学研究: 張竜妹、王成など
- 日本文化研究: 王勇、王宝平など
- 日本社会研究: 李国慶、龔穎など
- 日本政治経済研究: 李薇、張季風など
- 学会会長、学長: 胡振平、譚晶華など
- 日本で活躍: 莫邦富、沈国威、張麟声、王敏など

3、日本語教育と日本学研究

④、今後の課題

- 教育現場でのギャップ(特に大学現場で指導できる教師は、やはり語学・文学の教師が多い。「カシオ杯」優秀修士論文コンテストの資料)
- 日本語畑出身の研究者と専門領域畑出身の研究者のギャップ(二枚の皮が離れた状態では発展しにくい)

4、終わりに

- 日本語教育から日本文化理解へ
1979年12月大平正芳首相が訪中のとき、次のように講演された:
国と国との関係において最も大切なのは、国民の心と心の中に結ばれた強固な信頼であります。この信頼を裏打ちするものは、何よりも相互の国民の間の理解でなければなりません。
しかしながら、相手を知る努力は、決して容易な業ではないのであります。日中両国は一衣帯水にして二千年の歴史的、文化的つながりがありますが、このことのみをもって、両国民が十分な努力なくして理解し合えると安易に考えることはきわめて危険なことではないかと思えます。

4、終わりに

ものの考え方、人間の生き方、物事に対する対処の仕方に日本人と中国人の間には明らかに大きな違いがあるように見受けられます。
我々は、このことをしっかり認識しておかなければなりません。体制も違い流儀も異なる日中両国の間においては、尚更このような自覚的努力が厳しく求められるのであります。このことを忘れ、一時的なムードや情緒的な親近感、更には、経済的の利害、打算のみの上に日中関係の諸局面を築き上げようとするならば、それは所詮砂上の楼閣に似たはかなく、脆弱なものに終わるのでありましょう。

4、終わりに

- 国民の間の相互理解の増進を図る一つの有力な手段が、言語であることは、いまさら申すまでもありません。
中国における日本語の学習が中国の人々の日本の社会及び文化自体に対する幅広い関心の高まりにつながることを強く期待するものであります。
以上のような相互理解の努力を通じて、世界の平和とアジアの安定の創造に寄与する日中両国の関係をより深くより広く推し進めていくことこそ、今日、両国民に課せられた最も大きな課題であると信ずるものであります。

4、終わりに

- 日本語教育の目的は日本文化のよき理解者を育てることにあるに違いない。
- 日本が研究者は、それらのよき理解者の中での優秀な人でなければならない。
- その意味で、日本学研究はまず日本文化理解者のものでなければならない。
- 日本文化理解なしの日本学研究は浅いものにしかできない。

4、終わりに

日本(文化)理解のできる人材を養成して、初めて政治、経済、文化三位一体の「三輪車」型の交流ができる。
よく政治と経済は車の二輪と言われるが、二輪型の車は、「人力車」型(迅速に発展できない)か「自転車」型(不安定で倒れやすい)でしか考えられない。文化理解があって初めて「三輪車」型(安定して早く走る)の交流ができる。「三輪車」型の交流は、持続可能な交流であり、政治、経済の理解を深めていく方向付け(舵取り)のある交流になる。

